

故深田博士略歴並業績

明治十一年十月十九日 山形市香澄町にて東京府士族深田康守氏
長男として出生す。

明治十七年九月 宇都宮市小學校(西)入學。

同 十八年十月 埼玉縣川籠學校附屬小學校入學。

同 二十五年三月 卒業。

同 四月 東京高等師範學校附屬中學第二學年に編入。

同 二十九年三月 卒業。

同 九月 第二高等學校入學(無試)

同 三十二年七月 卒業。

同 同月 東京帝國大學文科大學哲學科入學。

同 三十三年 ケーベル氏宅に寄寓し、爾後留學前までの八年
間を此處に過す。

同 三十五年七月 卒業。

同 同月 東京帝國大學大學院入學。

同 三十六年 明治大學の授業を囑託せらるる帝國文學の編集事
務をこる。

同 三十六年三月 「人生の興味」(帝國文學)

同 四月 「曙光」(解題)(同)

同 三十七年五月 ケーベル、「カント百回忌に當りて」譯(眞理)

同 七月 「ヘルチーの幸福論」(眞理)

同 九月 「無意識哲學の第十一版」(哲學雜誌)

同 三十八年一、三月 「ハルトマンの無意識哲學」(第十版)(哲學雜
誌。

同 五月 「思想家としてのシルレル」(未完)(帝國文學)

同 六月 「シルレルが美學上の効績」(哲學雜誌)

同 三十九年一、三、七月 同

同 九月 第一高等學校より倫理及論理の授業を囑託せら
る。

同 十一月 ケーベル、「エドワルド・ハルトマン」譯(眞理)

同 四十年五月 美學及美術史研究の爲、滿三年間獨逸及佛國へ
留學を命ぜらる。

同 六月 依願第一高等學校及明治大學の囑託を解かる。

同 同月 歸朝。

同 四十二年十月 結婚、(京都市寺町頭に住居)

同 十一月 任京都帝國大學文科大學教授叙高等官六等

同 同月 美學美術史講座擔任を命ぜらる。

同 十二月 叙正七位。

同 同月 「感情移入美學に就いて」(藝文)

同 同月 「文藝上の眞」(藝文)

同 同月 長女菊子嬢出生。

同 同月 學術研究の爲上京を命ぜらる。

- 同 十二月 「文部省展覽會の日本畫を見る」〔美〕
- 同 同四十五年二月 京師帝國大學總長の推薦に基き明治三十一年勅令第三百四十四號學位令第二條に依り文學博士の學位を授けらる。
- 同 同 學術研究の爲上京を命ぜらる。
- 同 五月 「自然美に就いて」〔京都美術〕
- 同 六月 「ウインケルマンに就いて」講演
- 同 同 「ロダンの藝術觀」〔東亞の光〕
- 同 大正元年八月 「所謂新しい畫と古い畫」〔美〕
- 同 同 九月 「感情の心理と美學」〔心理研究〕
- 同 同 十一月 陞叙高等官五等。
- 同 同 「美學史」〔ギリシヤ美術史〕の覺書斷片が此年より始まり大正六年まで年々書加へられたるものゝ如し。
- 同 同 二年二月 叙從六位。
- 同 同年 三月 「ヘツベルの美學」〔藝文〕
- 同 同 四月 「美の研究」〔藝文〕
- 同 同 五月 「廣瀬哲士君」〔ベルケソン紹介に就いて〕〔藝文 雜録〕
- 同 同七、八、九月 「リッパス教授の美學」〔心理研究〕
- 同 同 九月 「自問自答」〔新人〕
- 同 同八、九、十二月 「感情移入美學に對する一つの批評」〔藝文〕
- 同 同 八、九月 「美術家と公衆」〔美〕
- 同 同 「カール・ビュローラー研究」の覺書斷片始まる。
- 同 同 三年一月 「フイヒテの生涯」〔藝文〕
- 同 同 四月 「美的假象」の覺書斷片が始まる。
- 同 同 五月 「美的假象」〔藝文〕一部發表
- 同 同 七月 「滑稽」〔藝文〕
- 同 同 八月 長男祝氏出生。
- 同 同 九月 陞叙高等官四等
- 同 同 四年一月 「美術批評の意義」〔新人〕
- 同 同 二月 叙正六位
- 同 同 五、九月 「美的假象」〔藝文〕
- 同 同 七月 「製作と理論」〔美〕
- 同 同 夏 「批評主義」についての覺書斷片が始まる、此年に又「カタルシス」についての研究覺書も始まる
- 同 同 八月 「序文」〔藤澤衛彦著、藝術美學〕
- 同 同 十月 「フーベルト・ヴァンアイクの筆」〔天使合唱〕〔藝文〕
- 同 同 十二月 次男發氏出生。
- 同 同 五年二月 「美的假象」〔藝文〕
- 同 同 四月 「藝術批評について」〔懸案〕談
- 同 同 六月 「宗教と美術」〔大阪講壇〕
- 同 同 七月 「容觀批評と印象批評」〔太陽〕
- 同 同 七月 「感情移入説非難概説」〔哲學研究〕
- 同 同 九月 「カントの判斷力批判に就いて」〔哲學研究〕
- 同 同 九、十月 美學と藝術學〔哲學雜誌〕

同 九月 「うづまさ」(藝文故上田博士追想録)

同 十二月 歴叙高等官三等

同 六年一月 叙従五位

同 二月 「知られざる傑作」(美)

同 二月 「ロツチエの美學」の覺書断片始まる。

同 四月 「形の問題」(美術新報)

同 五月 「見ゆる世界」(大阪講話)

同 五月 「ロツチエの美學」(ロツチエ記念號)

同 六月 京都帝國大學建築委員會委員を命ぜらる。

同 九月 「近代美學史」の覺書始まり、爾後年々書加へられしもの、如く大部の断片となる。

同 一、二、三、四、五、六、七、十、十一月 「美學の基礎に就いての考察」(哲學研究)

同 七年一月 次女隆子嬢出生。

同 六月 「美學の基礎に就いての考察」(哲學研究)

同 六、七月 「人生に於ける藝術の意義」(學校教育)

同 九、十月 「美の具象性」(哲學研究)

同 十月 「美しき魂」(思潮)

同 八年二月 「藝術批評」(制作)

同 五月 歴叙高等官二等

同 六月 「ケーベル博士論文集」(哲學研究)

同 叙正五位

同 八、九月 「藝術論の種々」(制作)

同 「アリストテレス以後の美學」の覺書断片始まる

年々殊に十三、四年に多量の追加あり大部のものなす。

同 秋

「藝術批評史(アリストテレス)」も又別に覺書として始まり十二年秋に多量の書加へあり、この問題は博士終年までの一つの研究主題となつてゐた。

同 同九年一、四、六月 「アリストテレスの藝術論」(藝文)

同 同二、六、九、十二月 「プラトニーの美學」(哲學研究)

同 七月 「藝術に於ける個性の表現と客觀的價値」(現代之美術)

同 十月 「繪畫の鑑賞に就いて」講演

同 同十年一、二、六月 「アリストテレスの藝術論」(藝文)

同 四月 「ルネツサンス」の覺書断片が始まる、爾後年々殊に十四年に追加さる、「ミケランゼロ」は講演覺書として準備さる。

「ラファエルの覺書」も此年より十一年にかけて研究追加さる。

同 同 五、七月 「プラトニーの美學」(哲學研究)

同 同 六月 「序文」(グローセ著安藤弘譯「藝術の始源」)

同 同 十一月 「模倣としての藝術」(思想)

同 同 十二月 「古い藝術觀と新しい藝術觀」(表現)

同 同 「フローベルに就いて」講演

同 十一年四月 歐米各國へ出張被仰付

同 叙勳四等授瑞寶章

同 五月 「プラト一の美學」(哲學研究)

同 「序文」(閑賴三著「藝術創作の心理」)

同 同 任地出發歐米各國へ向ふ。

同 十二年五月 「道德的美」(哲學研究)

同 八月 「ケーベル博士の逝去」(哲學研究)

同 同 同 「シルラーが美學上の功績」(哲學研究)

同 十三年一月 同

同 「悲劇に固有なる快感」(思想)

同 「劇作家への注意」(新舞臺)

同 五月 「藝術一般」講演

同 六月 陞叙高等官一等

同 「藝術への理解」(文化講座)

同 同 「藝術の本質に就いて」(女性)

同 同 叙勳三等授瑞寶章

同 同 叙從四位

同 同 同 「フィロストラトスの構想力」(哲學研究)

同 同 十一月 「藝術上の眞」(改造)

同 同 同 「一般美學」(美學と藝術學)の覺書が始まる、こ

同 同 同 れは此年の特殊講義の準備となり、一、二期期

同 同 同 を通じて書加へられた、これと別に「美學と藝

同 同 同 術學」の問題についての覺書が此年の研究とし

同 同 同 て、非常に大部のものとなす、蓋し大正五年

同 同 同

同 同 同 同題にて哲學雜誌に發表以來「藝術批評史」に對

同 同 同 立する他の一つの博士終年に至るまでの研究主

同 同 同 題となつてゐる。

同 同 同 「近代美學とカント」の覺書も此年を通じての研

同 同 同 究題目と成つてゐる。

同 同 同 同 七月 「近代美學とカント」の覺書も此年を通じての覺

同 同 同 書始まる

同 同 同 同 同 同 此年は發表に至りし論文を持つことが出来な

同 同 同 同 同 同 かつたが、研究そのものについては博士にまつ

同 同 同 同 同 同 ても意味深い年であつた。

同 同 同 同 同 同 「美術史上の基礎概念としてのルネッサンス

同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 「小山郷浦を懐ふ」(京都大學新聞)

同 同 同 同 同 同 「美學に於ける形式の問題」(文科大學講座)

同 同 同 同 同 同 「ライプニッツの美學」(哲學研究)

同 同 同 同 同 同 「カント判斷力批判」の覺書始まる。これは此年

同 同 同 同 同 同 の特殊講義の準備であり、一年を通じて書加へ

同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 られた。

同 同 同 同 同 同 「美的形式主義」の覺書断片(大部)始まる。

同 同 同 同 同 同 「ロダンの遺言」(新生)

同 同 同 同 同 同 「ハンスカールエルの指環」(文藝春秋)

同 同 同 同 同 同 「アメイルの日記の一節」(京都大學新聞)

同 同 同 同 同 同 同 「日の色」(中外日報)

同 十二月 「印象派の重鎮モネー」談、大阪朝日新聞

昭和二年二月 「知られざる傑作」(文藝春秋)

同 二、三月 「文藝問題」(アルス文化大講座)

同 二月 「藝術家の藝術論」(Dokus)に就いて、(ミューズ)

同 四月 「西洋美術史」の覺書断片始まる。

同 同 末女暢子嬢出生。

同 九月 「文學概論」の覺書断片始まる。

同 十一月廿日 美學演習中惡寒を覺え、直に歸宅臥床せられしが、高熱持續し腦症強く、恰も「腸チフス」様症候を以て十數日經過後右側濕性肋膜炎と確診さ

る、同年十二月末より一月に互り數回の咯血ありたれども、熱低く、氣分輕快を覺ゆ。

同 三年一月 「アリストテレスの藝術論」(思想) (但藝文既稿再録)

同 二月 病狀、漸次可良を加ふ。

同 三月 病狀殆んど一定し、離床歩行さへ可能なる。

同 四月 益々回復し、庭内散歩、讀書等を試みて甚しき害を認めず、自ら九月新學期の講義の計畫をさへ溢す。

同 五月上旬 突如喉頭に異狀を覺へ、耳鼻専門醫につき治療し、漸次回復。

同 七月 下鴨森本町より北白川半井町に居を移す。下旬

より再び高熱持續し腹膜炎の併發を見る。約一ヶ月後病勢稍衰へ暫く平熱持續し氣分爽快を覺ゆ。

同 九月 突然高熱を發し、呼吸困難を來し、同時に左肺全部に互り乾酪性肺炎症狀を呈せり。

同 十月八日 身體各部に浮腫出沒し、時々心臓の朦朧を見る

同 十月二十日 夜腸出血以來急速に衰弱を加ふ、五日以後昏睡狀態を持續す。

同 十一月二日 午後四時頃より全く危期に陥る。

同 十一月十日 午前零時半脈膊薄弱となり注射を試みる、家族の方々靜かに袂別を終る、爾後一時間半注射の效果薄るゝごさにも遂に永眠さる、時正に午前二時、枕頭に待するもの夫人、令弟(深田貫一氏)門弟(伊勢、中井)の四人。

同 同年 同日 叙正四位(特旨を以て位一級を追陞せらる)

同 同 同日 叙正四位(特旨を以て位一級を追陞せらる)

同 同 同日 叙正四位(特旨を以て位一級を追陞せらる)

同 同 同日 叙正四位(特旨を以て位一級を追陞せらる)

- 「ロマンテイシズム」
- 「ゴックールミフローベル」
- 「藝術の分類」
- 「Paucaisme」
- 「想像に就いて」
- 「笑についで」
- 「自然と藝術」
- 「Short-story 論」
- 「源氏物語繪卷に就いて」
- 「ニイチエと藝術」
- 「印象批評と客觀批評」(長年に互りて研究されしもの、如し)
- 「Naturgenuss」
- 「Rea. spots」
- 「美と表現」
- 「ギリシヤ詩に於ける藝術的判斷(アルテル)」
- 「自然主義」
- 「美しき魂」(長年に互りて書加へし跡を見る)
- 「プラトーの美學」(長年に互りて書加へし跡を見る)
- 「アリストテレスの美學」
- 「ヘーゲルの美學」
- 「ツエラーの美學」
- 「クローチエの美學」
- 「ザイタセークの美學」

「シエワイツェルの美學」

「シルラーの美學」(特に大部のものである)

「シルラーの美に關する手紙」

この外に特定の人に興味をもつて各別冊としてその人の記録所説、を集めし人名を左に掲ぐ。

「スピノザ」「ライブニッツ」「メイコン」「リツプス」「メツザ

ー」「コーヘン(論理學ノート)」「カツシラー」「ヴァーレン」

「デイルタイ」「ボサンク」「サントアブ、テリス、ピラン、

スチアンソン」「ステンダール」「ボードレール」

未定稿の翻譯として「カント判斷力批判」(十三年より最近まで)

(附記)

故深田博士が上田敏博士の追憶にあたつて、その薄れゆく追憶について、かく嘆かれた。「これ等のものは恰もポーの或小説に出て来る羊皮紙に、隠されたる財寶の在所を記したと云ふインキの如くに、今は殆んど讀み得ぬ位に薄く残つてゐる。そして此インキは何の暖爐の傍に持つて行つたら、一度隠れた文字を再び顯出するであらうか見當が附かないのみならず、顯出する文字も亦恐くは、其小説にある様に、其意味を解するのが容易でない所の Cypograph であるかも知れない。」この嘆きは、やがて私達の深田博士の追憶にあたつて嘆く嘆きとなるであらう。もしその時にこの記録が何等かの暖爐さならば幸である。もしその暖爐の炎の餘りにも冷きなかつたらあらば、責は一に筆者にある。私は再び

故博士のケール博士についての言葉を引いて、この稿を閉ぢやう。

「Höare Subjective の著者が其父の面影を描くに於いて確かに示してゐる *työjäsenäni* (to truth in love) の力は私には缺けて居る。而して博士は私に取りて何であるか、私の親しく知るを得た總ての生きた人々の中、博士の占めて居る又占むべき地位は何所にあるか、これが總勘定を試みるためには私は未だあまりに私自身に就いてこの知識に乏しいのを感じる」(中井正一記) (追記)

尙遺稿は舊友並びに同僚であつた諸教授の監修の下に、近く岩波書店より發行すべく準備をれつゝある事をお知らせしたい。



Gestalttheorie 論文集第二輯が出ました

前回の心理学演習用『ゲスタルト學說論集』の続きとして今回左の三論文を集めて印刷しました。

I. Kurt Koffka, Perception: an Introduction to the Gestalttheorie

右は英語國民に本學說の要旨を理解させるために起稿したもので知覺心理學の領域における新しい業績を總括的に述べてゐる點でよい鳥瞰圖を與へるものであります。

II. Max Wertheimer, Untersuchungen Zur Lehre von der Gestalt. II

これは前回の続きで模範的に明晰な叙述を以て本學說の骨子を説いた最も重要な文獻の一つであります。従つて種々の論文に引用されてゐます。W氏の思想家としての獨特の風格が、こゝにうかがはれるのであつて、言々匂々みな深く味ふべきものを藏してゐます。

本學說を知らうとする人の精讀を要するものであります。

III. Wolfgang Kohler, Zur Gestalttheorie.

これは同誌上に三號に互つて連載された Rignano の評論『イギリス心理學派の聯想主義に反對するドイッ新心理學派の形態の學說』に對する辯駁で、"Gestalt"、"Sinnvol" のやうな語に對する曲解を釋明したり、在來の哲學上の考へ方に對する "Seitman-Ime" をしたりしてゐる點で一般の讀者に參考になる最近の論文であります。

なほ卷末に數頁に互る解説を附けました。

○御希望の方は左記へ御申越下さい。

○本部金貳圓五拾錢

九州帝國大學法文學部心理学教室

佐久間 鼎

哲學茶話會

十二月十八日、樂友館に於て數學基礎論に於ける形式主義と直觀主義 下村寅太郎氏